◇海外における原爆報道

“The Irish Times”誌の原爆投下に関する記事について

ローナン ハンド

アイルランドは一九二二年に自由国を成立し、一九三七年にアイルランド共和国として憲法を制定し、民主的主権国家を宣言した。その憲法によりアイルランドが自国の港の支配権力を保証し、同じ憲法が主張した独立性に密接となった第二次世界大戦における中立政策が可能になった。ドイツとの外交関係が戦争を通じて正常に続き、ヒトラーの逝去の翌日（一九四五年五月一日）にアイルランド首相、デ・ヴァレーラ氏がドイツ公使を弔問したことがあった。第二次世界大戦当時に英連邦からの正式な離脱は成立せず、戦中のアイルランドの態度はイギリスをはじめ、連合国に偏った「中立」でもあった。例えば一九四二年以降、連合国の墜落した飛行機の乗務員がイギリス領である北アイルランドへ送られたが、ドイツ人の場合はアイルランドで抑留された[*1]。軍事行動ではない飛行がアイルランドを渡る許可や座礁した船員の抑留などにも、待遇の違いがあった。[*2]

新聞の報道においても偏見があった。『アイリッシュ・タイムズ』は原爆投下の当時、ロンドンのロイター、プレス・アソシエーション（P．A．）やニューヨークのアソーシエーテッド・プレス（A．P．）という通信社による情報を集めていたことから連合国に偏り、英米機関の発表などを引用しながら科学的発明としての原爆を評価した。一九四五年八月七日の前の紙面は次のようなものであった…

原子爆弾は現在日本に対して使用中

目覚しい新発明品

昨日、トルーマン大統領は米飛行機によって日曜日に広島にある日本の供給基地に原子爆弾が投下されたことを発表し科学界を仰天させた。「その爆弾は2万トンのＴＮＴ[*3]の威力、そしてドイツでＲＡＦ[*4]に落とされた爆弾の2千倍を越える爆発力を持った」と言った。さらに強力な爆弾が開発されていることや英米の科学者が数年の間、協力していることを明らかにし、大統領はこの新しい爆弾が「宇宙の基本的な力を利用するもので、火薬以来の戦闘では最もすばらしい進歩だ」と述べた。

「太陽の力を得たこの勢いは極東で戦争をもたらした者に対して放たれた」と言明し、「まちがいなく完全に日本の戦闘能力を滅ぼす」と付け加えた。ポツダムの最後通牒は日本の民衆を全く殺戮しないように出されたと断言し、「私たちは日本人が持っている地上の各生産的事業をもっと速やかに、完全に消滅させる覚悟だ。私たちは彼らの造船所、工場、通信や交通手段を全滅させる。もし彼らは私たちの要求を認めないなら、この世で見られたことのない廃墟の雨が空から落ちることを期待してもよい」とトルー マン大統領は言った。通常は原子力研究の全ては公表されるはずだと言いながら、現状は、「合衆国や世界のその他を突然の破壊の危機から守る方法がさらに調査されるま

で」開発の技術的過程、また軍事的応用の全部を明かす予定はないと大統領は述べた。「原子力を今放つことは自然の力に関する人間の理解の新時代を告げることで、合衆国における原子力の発生と使用を規制する委員会の開設を、私は合衆国の国会に勧める。原子力はどのように世界平和の保持のために役立つかをさらに考慮して国会に忠告する。」

ドイツ人は不成功に終わった

「一九三九年以前、原子力の放出の理論的可能性は科学者一般に認められたが、誰も現実にそれを行う方法は知らなかった。しかし、一九四二年になるとドイツ人が世界を奴隷にする他の軍事的技術に原子力を加えることを強く望んで必死になり研究していたと私たちは知ったが、彼らは不成功に終わった。「ドイツ人がV1とV2を得たのは遅くて限られた量であったということは神意に感謝するべきだし、彼らが原子爆弾を手に入れなかったことはさらに感謝するべきだ。私たちにとっては空、土、海の戦いのように研究室の戦いは決定的な危険を持つようになったが、私たちが他の戦いに勝利したようにこれで研究室の戦いにも勝利した。」

大統領は、一二万五千人が合衆国の原子爆弾の工場建設で働いたと述べ、現在六万五千人が操業中の工場に従事していると述べた。オークリッジ、テネシー、リッチランド、ワシントンにある原子力設備やニューメキシコのサンタフェの周辺にある装置などの詳細については、合衆国の陸軍長官スティムソン氏が述べるとトルーマン大統領は言った。チャーチル氏と故ルーズベルト元大統領が敵の空襲の圏外となる合衆国で原子爆弾を製造し続けることが賢明だと同意していたと明らかにした。

ドイツの原爆開発における不成功に対して、連合国科学界の協力で得られた「業績」に注目したスティムソン陸軍長官の発言が詳細に引用された…

業績

スティムソン氏は新爆弾を「科学・産業と軍事が結合した努力の歴史上最高の業績」として歓呼して迎えた。「原子爆弾はイギリスとカナダの完全な知識と協力によって発展され、相当の特許規制は既に完成されている」と語った。原子爆弾計画の波及効果はあまりの大きさに至ったので、一九四三年の八月にあたって方針を結合する委員会が設立され、サー・ジョン・ディル陸軍元帥（イギリス軍のワシントンの総合参謀部）とJ・J・クルーエリン大佐（供給を管理するワシントン居住大臣）がイギリスを代表し、ヘンリー・スティムソン氏とジェームズ・B・コナント博士（ハーバード大学長）、バネバー・ブッシュ博士（科学研究所所長）が合衆国を代表し、C・D・ハウ（カナダ軍需大臣）を代表した。クルーエリン大佐は後でサー・リチャード・キャンベルに代わり、さらにハリガクス卿に引き継がれた。

有用なカ

「今の証拠からみると、世界の状況において、科学や産業が平時の応用に集中することが可能なときが来たら、最終的には人類の幸福に多くの有用な貢献がこれらの発見から広がることは

必然だ。しかし、原子力を有用な力に変換できる機会をつくるためには、さらに深い調査が行わなければならない。それはどれ程の時間がかかるか誰も予想できないことだが、多年を要することは確かだ。」

この案を編成した天才は、ニューメキシコにおける砂漠の研究所を計画したロバート・オッペンハイマー博士だとスティムソン氏は公表した。「爆弾自体の発展は主に彼の天分、それに、同僚に対して彼が励みになったり統率力を発揮したりしてくれたお陰だ」とスティムソン氏は言った。四一歳の物理学者であるオッペンハイマーはニューヨークに生まれた。ハーバードを出てからイギリスのケンブリッジへ留学した。物理学の博士をドイツのゴティンゲン大学で取り、その後カリフォルニア大学の物理学の教官となった。

小型の爆弾

自分を科学者でも爆弾専門家でもないと言った飛行機製造省の代表は、「ブロックバスター[*5]より十倍小さいのだが数倍の勢いがある。とても控えめに言うと、一つの爆弾が巨大地震に相当し、一つの町を完全に消滅するはずだ」とプレス・アソシエーションの記者に語った。「おそらくこの爆弾は未来の私たちの人生に革命的な影響を及ぼす。『科学的脳みその企業合同』がほとんど無限の力を制限したり放出したりする方法の問題を解決した。まだその結果を測ることはできない。」

アメリカのその材料不足を補うために、原子爆弾の製造において不可欠である放射性の金属、ウランが、世界のウラン鉱物資源の豊富な国の一つであるカナダより供給されたとロイターのオタワ特派員は語った。

カナダ軍需大臣のハウ氏によると、カナダ人の科学者が爆弾の発展では重大な役割を果たしたが、西北のオタワでは合衆国とイギリスとの協力でその上の研究のために設備を設立することを引き受けた。

硬くて白い金属であるウランは、一七八九年に初めて発見されたが、単離されるのには一八四〇年までかかり、それは黒い鉱物のピッチブレンド[*6]の中で生じ放射性である。コーンウォール、ボヘミア、ノルウェー、合衆国のある地方、ベルギー、コンゴでも見つけられる。

原爆は「一つの町を完全に消滅するはずだ」と書かれているが、広島の「日本の供給基地」、「要塞化した港」、また「日本陸軍の重要な部隊補充本部」といった繰り返される記述から考えれば、『アイリッシュ・タイムズ』の読者には主に、軍事的な標的に限った破壊をしか予期させなかっただろう。それに、破壊の程度より科学新発明としての原爆の業績、さらにそれが引き起こす新時代の方に注目が集まる傾向がある。それは七日と八日にはまだ詳しい情報不足で当然なことだと考えられるが、十一日の記事にいたても同じ調子が続いている。

新時代の誕生

歴史上、初めての合成実験としての原子爆発は、雷、稲妻と雨で揺れている空の下に、科学者や軍事専門家が木製と土製の避難所で制御盤の前で屈んで、鉄塔の上、ニューメキシコの砂漠

で行われたとロイターは伝えている。
構成員が離れたところから集まるほどに、科学者間の緊張感は高まった。一つの過ちで皆が破壊され、皆の努力は虚しくなると知っていた。
皆が新時代―原子力の時代―の誕生に立ち会っていると感じたようであった。
一番近い監視所は塔から南の方に一万ヤードの距離で設けられ、塔から一万七千ヤードの距離にあった一番良い監視所は、レズリー・グローブズ大将、科学研究局長であるバネバー・ブッシ博士、ハーバード大学長であるジェームズ・B・コナント博士などの重要な計画の構成員が配置された。兵隊科学者が非常事態の命令には爆発を中断する覚悟をして、予備のスイッチの横に立っていたが、実験は真に衝撃的な成功にまで進んだ。
目撃者によると―「眩しい閃光があって、一番明るい日光より明るく全面を照らした。背景に監視所から三マイル離れた山脈がくっきりと見えた。恐ろしく響き続く爆音がして、爆発から五マイルにあった管制塔の傍に立っていた二人を倒した強い圧力の波が来た。直ぐ後、巨大な多色の膨らんだ雲が四万フィートの高さまで沸き立った。その邪魔となっていた他の雲は消えた。爆弾を吊るしていた鉄塔は完全に蒸発していた。塔の位置には巨大に傾斜した穴が空いていた。
広島に初めて投下された原子爆弾は合衆国軍事省の説明によると「標的の地域が埃と煙で覆われ、正確に破壊を報告することは不可能であった。広島は神戸から西方へ一八九マイルの距離にあり西本州の広島湾の辺にある要塞化した港である。日本陸軍の重要な部隊補充本部である広島は人口が二四万四千人を占める。製造所、紡績工場や軍事産業を持つ。」

燃料一杯で大西洋を横断！

新爆弾の力の、今まで知られている力との比較しがたさについて述べていたある科学者は「産業で、この力がもし利用できることになれば、それは燃料一杯で『メリー女王』[*7]を運転し大西洋を渡り切ることに相当すると言ってもよい」と語った。

デンマーク人の科学者の功績

原子爆弾の発展を促進した者として合衆国陸軍長官のスティムソン氏に評価された、難民のデンマーク人科学者のニールス・ボールは、一九四三年九月にデンマークからスウェーデンへ釣船で逃げたことによってドイツ人より逃亡した。到着直後に、ドイツ人の工作員の手に渡さないようにスウェーデンの警察に囲まれたのは、デンマークの官庁より要請されていたからである。
ボール[*8]はドイツ人の占領に抗議し、一九四〇年に原子の理論に関する実験所での研究を停止したが、ドイツ側の戦争の状勢が悪化するにつれ、ナチスは新しい爆発物の開発でボールを協力させたがりはじめた。
スウェーデンで十二日間を過ごし、モスキートの爆弾用の仕切り室に乗り込み、ドイツによるノルウェーの空中封鎖を通して

イギリスまで急いで送られ、それと共にノーベル物理学賞を得た彼の貴重な情報も伝わった。

原子爆発に関わる新しい軍事的発明に関する資料も持ち、おそらくこれは現在日本に投下されている原子爆弾の開発で利用されたのであろう。

ニューヨークからの海外電報によると、原子爆弾が世界中で追求されはじめたきっかけは、ユダヤ系ドイツ人女性の数学者、リーゼ・マイトナー氏が十年間科学界を困らせていた問題を、ウランの原子の爆発として解いたことであった。二週間の内にこの解決は発表され、イギリス、アメリカとドイツにある卓越な実験所では彼女の予測が確認された。原子爆弾はヒトラーのＶ３兵器となる予定だったし、一九四三年イギリスとノルウエー落下傘兵によってノルウエー、リューカンの実験所への急襲がなされなければ、そこで使用されたであろう。一年後ナチスはもう一つの施設を持っていたが、これも十二トンほどの原子爆弾に必須な材料である重水がＲＡＦによって破壊された。

「新発明でのイギリスの役割」も注目される。「新しい原子爆弾の発明でのイギリスの役割について、ウィンストン・チャーチルに書かれた説明が昨夜ロンドンで発表された」という見出しでその説明が記載されている。チャーチル氏の説明は一九三九年に科学界で核分裂の可能性が認められたことで、オクスフォード、ケンブリッジ、ロンドン、リバプール、バーミンガムでは（大概大学における）研究の発展について述べ、「そのときに産業科学研究局の中に諮問委員会を作成することが決められた。（中略）その重役会は極秘のために『チューブ・アロイ計画』と呼ばれた。」と明らかにした。

「一九四一年十月十一日ルーズベルト前大統領は手紙で、この重大な件で広がった努力が調整され得るのであれば、あるいはそれが合同に行い得るのであれば、その努力は効果的なものに成りうるだろうと促した。それに応じて、イギリスとアメリカの努力はすべて提携され、数人のイギリス人の科学者が合衆国に移動した。一九四二年の夏までにこの拡大された研究計画が、一年前の前途有望な予報をより安定した基礎の上で確かめ、広大な製造工場の建設を進めるか否かを決定する段階に至っていた。」

「この時期にイギリスは軍事的製造で既に限界に達していた」ことと「イギリスはドイツの爆撃機の範囲に容易に含められていた」という二つの理由で全面的に製造工場建設はアメリカで行うと決定されたとチャーチルは述べる。この専門委員会の五人がチャーチルの記事で簡単に紹介され、その一人は―「原子についての大家であるケンブリッジのＪ・Ｄ・コッククロフト博士が、十三年前機械によって初めて原子を分裂させた人として有名になった」と説明されている。

これにアイリッシュ・タイムズ誌は、次のように括弧で付け加えている…

「現在トリニティー・カレッジ・ダブリンのフェローで実験物理学の教授をしているアルスター出身[*9]のＦ・Ｔ・Ｓ・ウォールトン博士[*10]が、クロッケット博士[*11]と提携したことは記憶に

残るだろう。この功績は二人の共同研究の結果だと評価された。[*12]」

翌日の八月八日までには、日本からの通信が受信された…

日本からの形容詞

原子爆弾が陸軍都市の広島と日本人のモラールを深くぐらつかせ、新兵器に対する日本の恐怖がそれを描き出す先例のない形容詞の連続―攻撃は「無慈悲な」、「理不尽な」、「破壊的な」、「野性的な」、「獣欲的な」、「無罪の民間を大虐殺するために計画された」ものだと言った。アメリカの「自慢された日本国本土の侵略の遅い進行に対するじれったさ」が原爆使用の一つの主となる理由とされた。

その横に、「**原爆発見によって戦略的決定は時代遅れとなる**」という題名の下で、ロイターやP．A．を通じて得られた専門家などの引用が詳しく並べられ、原爆のより広い含蓄が参考されている。

原子爆弾は昨日世界中の第一の話題であった。巨大な力の新しい資源が人類の手に置かれたことを科学者たちが議論し、将来の戦争では全体の都市が一撃に消滅されうることも予測した。建設的な面では、既成の燃料と電力の強力な代用や月への旅行、小さな原動機に動かされる巨大な定期船などを思い描いた。ニューヨーク・タイムズ誌によると「人類の政治的考え方の上にのみ文明が今後、生き残り得る。」とあり、この発見によってポツダムの戦略的決定が廃れ、防衛はダーダネルかスエズ運河かまた何某川か何某山脈の支配によって決まるものではなくなるとロイターの軍事通信員は考えている。

世界中のウランの備蓄を、国連のような国際機関によって、捕獲し統制すべきだと、原爆の計画に協力したH．A．ウィルソン博士は述べた。内燃機関は十年間の内に廃れるとフェルス・プラネタリウムの所長、ロイ・マーシャルは言い、サウス・カロライナ大学のブォルラス博士は「ウランの力によって、月に辿り着く人間の試みが成功する可能性が出てきた」と述べた。チャーチル氏に原子力研究の責任者として任命された枢密院議長と大蔵大臣であるサー・ジョン・アンダーソンはP．A．の記者に語った―「原子爆弾が出す巨大なエネルギーは破壊ではなく、人類の利益のために利用されるようにしなければならない。それは、日本での原爆投下に期待されている結果をものともしないで私は言う。今まで、この偉大な発明に関しては破壊を目的にする研究以外が話題になるような研究は一切されていない。軍事的目的が優先されてきたが、原爆のエネルギーを産業開発で利用することに関する研究が始まれば、この偉大な発明に関する基本的な調査および全般的な原則は存続する。私が思うに長い時間がかかる。これまでに、経済上炭鉱と石油と競争できる〈原子力〉を適応する効果的な方法は未だ工夫されていない。今のところではそういう方法が見つかるかどうかは疑わしい。この破壊的な力を利用するための巨大な経費〈£五億〉を見ただけで、産業的な価値を見つけるための経費はどれくらいかかるのかということが分かる。善かれ悪しかれ適応の可能性は無限だ。一方で、人類の利益のために好結果的な発達を期

待する正真正銘の宝物庫があるかもしれない。他方では破壊、分解と死の狂暴な悪夢の実現があるかもしれない。」と放送でサー・ジョンは述べた。

ニューヨークの株が下がる

昨日のウォール街では、原爆の展開が日本に対しての戦争が意外と早めに終わる予兆として考えられ、株式市場の値段が三点ほど下がった。鉄道、飛行機、鋼鉄、と公益事業株が一番大きな差を示した。より小さい下落は金属、ゴム製品、石油と自動車の産業に示された。

「科学的発展ではこれは一番大きなことだ。全く新しいものだから、電力より将来性がたくさんある。」

ギルバート・マリー博士（国際連盟の代表会議長）はP.A.の記者に述べた―「こういう爆弾の作り方に関する知識を、世界中へ一般的に広めることは一体どれくらい可能でどれくらい賢明なのか？　今大変危険がある。一つか二つの国家の秘密として保つのは非常に大きな困難がある。ここに一つのとても面白い憂慮すべき問題が出てきたと私は思う。」

ヒトラーの誤り？

科学界が息を止めて原子爆弾をこの五年間待ってきた、とエディンバラ大学の化学部の教授ケンダル博士は語った。「もしヒトラーが思慮のある人であれば、ドイツ人によってこれが進められるまで戦争をすることは遅らせられたはずだ。そうすれば戦争は殆ど六年間続かずに六日間で終わった。地球全体を爆発することについての話はまだ早いと思うけれど、都市を全て消滅することは可能なことだと思う」とフランスの優秀な科学者であるルイ・モリース・ドゥ・ブロウイーは述べた。

アメリカからの最初の目撃の報告も記載されている。

目撃者が恐ろしい襲撃の説明をする

昨日、新爆弾を「世界史上の最も革命的な発明」として描き出したスパッツ陸軍大将出席の記者会見では、広島の爆撃に関する詳細が公表された。たった一つの原爆が二千台のスーパー・フォートレスの空爆に等しいと彼は語った。

近い将来に再び投下されるかと質問され、スパッツ大将は微笑んだ。もし六百台（爆撃の平均的台数）のスーパー・フォートレスが皆新爆弾に武装され、日本を攻撃すればどうなるかという質問に対しては答えなかった。恐ろしい爆弾を運んだ飛行機の全乗員が遠く離れていたにもかかわらず高射砲による爆発のような衝撃を感じたとA．P．通信員は語った。スーパー・フォートレスを率いたポール・W・ティビッツ大佐二世、米海軍の軍需専門家のウィリアム・S・パーソンズ隊長は爆発を恐ろしく畏敬させるものとして思い描いた。

二人とも破壊の見積もりができず「広かったに違いない」と言明した。

三四万三千人の都市はもはや存在していないと考える根拠がある。

この使命のためにティビッツ氏は特別な訓練を受け、スパッツ大将は使命をたいへん重要なものと考えていたので、飛行後、

飛行機から降りたばかりのティビッツに「高貴出征の十字」を与えた。

目で見える衝撃

原子爆弾がまともに広島の中心を撃ち、その閃光と衝撃が十マイル離れていたスーパー・フォートレスの乗務員一人の歴戦勇士を「オー・マイ・ゴッド!」と言わしめたと目撃者は語った。

「皆が保護のためにサングラスをかけていたのに、目で見える衝撃があった。煙の山が上がりながら、湯気が下がっていた。上に白い煙があったが千フィートくらいまで、渦巻きながら沸いて出た埃があがっていた。

「すぐ後、小さな火事が都市の際に始まったが、都市自体が全て煙に覆われていた。二、三分くらいそのまま待ったが、そうすると煙がもう四万フィートまで上がっていた。」原子爆弾が落下傘によって広島に落とされたという日本の報告については「巨大な爆発の範囲のため的確さは不要であり、遅い落下は飛行機を無事に脱出させる時間を与えてくれるということから判断すると、そのような方法でも十分筋が通っている」とマッカーサー大将は語った。なぜ東京が米空軍に選択されなかったかという質問に対しては、「もし日本の首都を撃ったとすれば、多分降伏することができる何の中央機関も残っていないはずだ」と述べた。

ロシアが原爆の秘密を知っているとは思わない、とワシントンの軍事代弁者は語った。

「自動車の設計に革命は即時ではない」という表題で自動車生産技術や設計におよぶ影響、またその産業における原子力の利用は長年かかるということが自動車専門家に推測されている。『ベルリンのユダヤ人の女が発見の連結」ユダヤ系オーストリア人の元カイザー・ウィルヘルム研究所の所長であったリーサ・マイトナー博士についての記事も記載されている。原爆の開発で大事な役割を果したと書かれている―「広島の日本陸軍基地を恐らく破壊した驚異的大発見に貢献したことは、昨日義理の兄弟ジャスティニアン・フリッチュ博士によって語られた。」

以上の文書を見ると、破壊の程度への期待の範囲が見えてくる。

「首都を撃ったとすれば降伏することができる何の中央機関も残っていないはず」というほどの力を持つ原爆が「日本陸軍基地」という限られた標的を「恐らく破壊した」と記述されている。しかし翌日八月九日、日本による詳報が「アイリッシュ・タイムズ」に記載され広範囲の破壊が明らかになってきた…

東京が、広島に無数の死者と報告する

「殆どの生物が全て焼き殺された」

原子爆弾の破壊力は筆舌に尽くしがたいと東京は昨日報告した。

「死者は実に数え切れないほどで、死者の男女を区別することも出来ない。殆どの広島の生物が全て焼き殺された。」死者とけが人の見分けがつかないほど焼かれ、当局が民間人の数を確認することが出来ないと東京のラジオ解説者が報告した。街が恐ろしい廃墟と化していると言った。

「建物は極悪な爆弾に撃たれ、室外の各生物が熱で実に跡形もなく消えた」と解説者が述べ、「室内にいる者は、言い表せない

圧力と熱で死んだ。非常医療機関を含めて家とビルが砕かれ、医療当局は手一杯だ」と付け加えた。

「敵は人道の仮面を完全に脱ぎ捨てている。この残忍な新兵器の使用によって、日本国本土での日本国の全軍隊が優位に立たないようにしている。このように無罪の日本民間人を殺すことで、太平洋戦争を早めに終わらせようとしている。」とその後、東京の放送が伝えた。ある東京の新聞は、スイス政府に米政府との仲裁をすることを「要求」した。「アメリカの発表によれば、スーパー・フォートレスがポツダム宣言を印刷したチラシを日本領で投下している。同時にアメリカが攻撃を予定している都市の市民を警戒するよう促す他のチラシも投下している。こういう態度は極悪非道の矛盾である。こういう無差別な襲撃で、生きたまま焼死するのが結局、女性と子供達であることをアメリカ人は無視しているようだ。」と述べた。

警戒

太平洋の戦略的空軍を率いているスパッツ大将からの声明によると、原爆は広島の六割を消滅した。都心が、巨大なブルドーザーがビルと家を取り除いたような「ひどい徹底さ」で消滅せられたということが、七マイル半の高さほどの煙と埃の山が、晴れてからすぐに撮られた偵察の写真に示された。「都心に少数のコンクリートの建物しか残らない。それらは防空壕だと考えられている。」

日本国民はチラシで「原爆された」[*13]と知らされ、将来をもっと期待すべきだとスパッツ大将は公言した。大量自殺の危険を冒すか降伏するかを選択しなければならないと米海軍省は日本にラジオから警戒を発している。「アメリカは現在、日本全体の生物を数日間で破壊する手段を持っている」とテキサス大学のジョージ・W・ワットは語った。

トルーマン大統領はワシントンに戻り内閣の会議を要求している。連合国は、戦争と平和のための、今まで考案された内最も強力な兵器を持っているという期待を抱かせると言い、いつの時代にも人間の利益となる最高の発明かもしれないと語った。大きく破壊された地域でこれから数年間放射能によって死亡が引き起こされ続けることは、昨日、合衆国戦争省に否定された。戦争省は発表で、オッペンハイマー博士を引用して「かなりの放射能が広島の地上にはないと考える根拠はたくさんあり、僅かにあった放射能も早くに衰退したはずだ。」とし、「攻撃についての内閣官房長官の発表を聞くため」、日本の閣僚と副閣僚の全員が総理大臣の鈴木長官の官舎に召集されたと日本の通信社は語った。

九日に前の紙面の頭には「（さしあたり）二つ目の爆弾は投下されない」という題名がある—

「アメリカは、日本人が一つ目の原爆投下の荒廃的な結果を調査できる時間を与えた後にしか、二つ目をやむなく放つことはない。」米軍の当局者は昨日語った。「完全な軍事的、心理的効果を得るように、直ちに再び使用するべきではないと思う。実に軍隊の気持ちを言えば、これは絶対に必要にならない限り使

いたくない。日本人がやらせるのでなければ、我々にとってはこれは全くしたくないことだ。爆弾の結果を完全に判断させるために少し時間を与える。」と述べた。

―しかし八月十日には長崎における原爆投下が報告される…

二つ目の原子爆弾が日本に投下

二つ目の原子爆弾が日本に投下された。対象は、殆ど二三万人に及ぶ人口の「中国とヨーロッパへの門」と呼ばれる港町の長崎であった。飛行機の乗務員が「良い結果」を報告した。昨日トルーマン大統領が専門家の一団を集め、原子爆弾についての会議を行った。招集された者の中に、陸軍長官スティムソン氏と原爆の発展管理における最高責任者、陸軍少佐グローブズも含まれた。

原爆が日本との戦争にどのように影響するかという質問に、東南アジアの司令長官であるルイ・マウントバッテン卿は昨日記者会見で次のように語った―「作戦を計画し続けて、敵に最高の圧力をかけることは司令官の仕事である。原爆は、この戦争を終わらせるという前提で私が働いたのでなければ愚かなことである。」

原爆投下が無慈悲と思うかどうかという質問にマウントバッテン長官は「原爆はもし日本人を殺し、私達の味方の死傷者を減らすものであるならば、当然味方の人々が不必要に殺されたことを支持しない。私たちの味方の最低の死傷によって、できるだけ多くの日本人を殺そうと努めることは私の責任だ。」と答えた。

原爆とサンフランシスコ会議の結果「世界が立ち止まって考えさせらるような人類の歴史のある段階に立っている。これはきわめて重大な段階だ」と南アフリカ首相のスムツ陸軍少佐は昨日語った。

原爆に反対する意見も初めて記載される…

指導者への抗議

原爆投下を抗議する電報が、トルーマン大統領とアットリー氏へ空襲制限委員会の委員長H・スタンリー・ジェボンから送られた。カトリック・ヘラルドの編集主幹であるマイケル・ドゥ・ラ・ベドイェール伯爵は次のように書く―「戦争を通じて教皇はキリスト教の、戦争の兵器における合法と非合法との区別を主張し続けてきた。実行の上でこの教えは、好戦的な者には無視されている。倫理を問わずにますます恐ろしく、ますます無差別的な兵器を発明する過程が、想像し得る実際的な可能性の限界を越えたこの原子爆弾の発現によって、今最高潮に達している。このような兵器の使用実態が弁護の余地のないことだけではなく、これほどひどい目的に至ることは、今まで皆が歩んできた道の不道徳さを証明すると私たちは考えている。」

ストックホルムの新聞「アフトンブラデット」では、原爆投下によってアングロサクソン人が戦争犯罪人になっている。都市と民間に対しての空襲作戦はドイツによって始められたが、この分野の記録が全てアングロサクソン人によって破られている。一九三九年に歓呼して迎えられたいわゆる戦争のルールが、広島の爆弾投下に第一種の戦争犯罪の汚名を着せるはずだ。都市

の全体とその全住民とを実験台とモルモットにしたこの出来事は、戦いの栄光をその立案者に全く映さない。

リズボン・ボース［新聞］は「異教徒に対しても—日本人に対しても—この原爆の使用は嘆くべきものだと私たちは思う。」と、またボンベー・センティネルガ原爆の使用については「毒ガスの爆弾を降らせることより酷い」と述べた。A・M・ロー博士、イギリス工学技術研究組織の会長は昨日、プレス・アソシエーションの記者に語った—「原子力が制御されるまでは燃料として利用できずに、戦争・爆発にかかわる工業でしか利用されない。しかし初めての月への旅で使う燃料の問題の解決が原子力であることについて、私は疑問を持たない。これから百年間の内に人類は月に到着すると私は考えている。」

当時アイルランドのティーシャック（首相）のエーモン・デ・ヴァレーラ氏による原爆の言及が記載されているが、言及といっても、ついでに言われたことに過ぎない。[*14]

デ・ヴァレーラ氏が原爆に言及する

昨日、デ・ヴァレーラ氏がカラック野営地で射撃大会の優勝者に賞を与えた。全国の地域を代表した千人の兵隊に演説する際、「原爆について話しているこのごろは、兵隊のより軽い兵器—個人の武器—が将来、余り大事でなくなるかのように見えるかもしれない。しかしそれは大きな間違いである。他にどういう兵器があるにしろ、兵隊の個人の武器はいつまでも大事である。」

八月十一日、日本の降伏に対する国々の反応—ワシントン、モスクワ、パリ、バチカン、メルボルン、シドニー、マニラ—が記載される。ロンドンは次のように記載される…

報告を受けた直後、内閣の会議が召集され、ダウニング街に到着した閣僚は群衆から声援を送られた。数分の間、ピカデリー・サーカスは興奮している大勢の人でごった返し、どこの事務所の窓からも紙くずの雪嵐が降っていた。

それとは対照的な「**ダブリンはニュースを大人しく受ける**」風景も隣の欄に描写されている…

日本が出した降参の提案は昨日ダブリンで第一の話題になっていたにもかかわらず、人々が安心したことは明白ながら、外見には興奮は映されなかった。V－Eの日[*15]と違いデモは無かった。新聞社は正午の簡潔なニュース放送を確認したがる人の電話攻めにあった。他の人々が連合国の公使館や領事館がそれぞれの国旗を掲揚しているのを聞き、ニュースを得るために、それらの情報源に集中した。公式な報告を日本政府から受けているかどうかを尋ねるため「アイリッシュ・タイムズ」の記者が日本の総領事に電話したが「別府さんは只今手が離せない」と言われた。日本の領事である市橋和夫氏からも連絡は取れなかった。政治通信員によると、降伏の公式な条件が—そうのがあるとすれば—発表されるまで領事館の意見が定義できない状態にある。ドイツの場合はドイツ政府はすでに存在しなくなっていたので、簡単に同様のものとして見るとことはできない。日本の天皇の御世が続きそうという最初の兆候である。外交関係の代表が天皇により派遣されるため、天皇が残ればダブリンの領事館員が在職し続ける可能性がある。

「教会の指導者が講義する」という見出しで「原爆の使用を一時的に停止するように、アメリカのプロテスタント教会の指導者の二人により合同発表で懇願された」ことが記載されているが、当時アイルランドの世論に一番強い影響を及ぼしたのはローマ・カトリック教会であったと言えるものの、バチカンは直接引用されていない。[*16]

原爆投下は、当時のアイルランドの人々の話題の一つであったには違いないであろうが、第二次世界大戦終結前後の生活上の不足がもっと緊急な問題であったことが推測される。原爆投下以降の二ヶ月間、「アイリッシュ・タイムズ」誌で記載される読者の手紙は一つも原爆投下を取り上げなかった。一九四五年に再開された十月十日から一九四六年末の国会と上院における「原爆」言及を検索しても、その多くの部分では、「原爆」という言葉は「最悪の場合」を表す比喩的表現として用いられたり皮肉な調子で相手を大袈裟に嘲笑する発言で使われたりしているにすぎない。

注

1　R.F.Foster,"Modern Ireland 1600-1972"Penguin Books'London 1989,p.561

2　Ireland in the War Years and After 1939-51 ed. Kevin B. Nolan and T.Desmond Williams、Gill and Macmillian Ltd., Dublin 1969, p.24

3　Trinitrotoluene（強力火薬の名）

4　Royal Air Force（英空軍）

5　大型の高性能爆弾

6　れきせいウラン鉱（ウラニウム・ラジウムの主要原鉱）

7、Queen Mary，大洋航路客船の名。

8誤植…BohrはBohnと記載される

9北アイルランドのアルスター（Ulster）地方。その大部分はイギリス連合王国占領

10誤植…ウォルトン氏の正しい名前の頭文字はＦＴＳではなくＥ・Ｔ・Ｓ・である。

11誤植…CockcroftはCrockettと記載される。

12ジョン・Ｄ・コッククロフトとＥ・Ｔ・Ｓ・ウォルトンがケンブリッジ大学にあったアーネスト・ラザフォードのカベンヂッシュ実験所で陽子の速度を速める高電圧装置（直線加速装置）を発明した。一九三一年にノーベル賞受賞。

13 "Atombombed"

14原爆投下当月、アイルランドのドーイル（国会）もシャナッド（上院）も休会中であった。一九四五年の休会期間は七月二十日から十月十日までであった。

15、Victory in Europe Day,，ドイツが降伏した一九四五年五月八日

16原爆投下がパイウス教皇十二世にも非難され正当なローマ・カトリック教会の教えに即するその意見は「全体的な都市や広い地域とその住民に対する無差別な破壊の作戦が、神様と人類に反する罪である。」バチカン新聞の「オブセルバトーレ・ローマノ」は一九四五年八月七日の発行でこう述べた…「この戦争は破滅的な結末を与える。信じられないことながら、この破壊的兵器は後世―歴史から学ばないものとして我々は辛い経験を通して知るようになった後世―の誘惑として残る。」

マーク・ウェバー「広島は必要だったのか?」、Journal of Historic Review http://www.ihr.org/jhr/v16/v16n3p-4_Weber.html（論者の訳）